山とスポーツクライミング情報誌

登山月報

JMSCA 登山月報　第676号　令和７年７月15日発行

関西クライマーの聖地「雪彦山」

- 会長就任挨拶　会長　町田 幸男 …… 2
- Next Generation Cup 2025 in Ryuoh …… 3
  わたSHIGA輝く国スポSC競技リハーサル大会 開催報告
- 第11回ボルダーユース日本選手権倉吉大会（BYC2025）開催報告 … 4
- 第61回海外登山技術研究会2025埼玉県開催＆ …… 6
  令和７年度全国国際委員ミーティング報告
- 港区立高松中学校ボルダリングウォール完成記念セレモニー＆体験会 … 8
- 2025年度山岳レスキュー講習会（無積雪期・西部地区）報告 …… 9
- 令和7年度全国指導委員長会議及びスポーツクライミング代表者連絡会議（ＳＣ合同）報告 … 10
- Enjoy Climbing …… 11
- 栃木県山岳・スポーツクライミング連盟自然保護委員会のSDGsな活動 … 12
- JMSCA、寄贈図書、表紙のことば …… 13

No.676

会長就任挨拶

会長　町田 幸男

2025年６月22日（日）第14代会長に就任いたしました町田幸男で御座います。就任に際し所信、ビジョンをお話しいたします。

【組織力の強化】

JMSCAは総務、登山、スポーツクライミング（SC）の３つの部会と独立委員会で成り立っています。組織強化に向け、業務執行理事に総務部を管轄する望月啓治専務理事、登山部長に廣川健太郎副会長、SC部長に畑中渉副会長、事務局に赤尾浩一事務局長（再任）をおきました。JMSCA全体を掌握したマーケティングを実現させるため小田部拓常務理事を起用致しました。副会長は登山、SC部長を兼任し、組織のスリム化と業務の効率化を図ります。それぞれの委員会には担当理事を７月までに配置し、活動、運営について監督してまいります。

理事の皆様の在り方は大変重要です。担当する委員会のみならずJMSCA全体を常に俯瞰し、意見具申をお願いします。理事会はJMSCAの意思決定機関です。

【事務局、委員会の再確認】

各委員会についてはその在り方について改めて考えます。まずは組織管理運営規程を見直します。委員会が増えれば管理費や活動費が増え、財政にも影響します。今の委員会はJMSCAに必要なのか、機能を果たしているのかなど議論が必要です。現状の活動踏襲ではなく、あるべき姿はどうか、５年10年先を見据えたビジョンを掲げるべく議論をお願いします。必要によっては委員会の統廃合も考えなければなりません。組織のスリム化はフットワークを向上させ、財政基盤の向上にもつながります。組織管理運営規程については９月末までに内容を見直し、10月の理事会で改定する予定です。

要となる事務局の現状を見ますと常に多忙を極めています。ここ数ヶ月望月専務と現状を整理してみました。事務局の仕事は多義にわたりますが、その分掌が不明確な部分があります。誰が何を担当し、どのマニュアルに沿って業務を遂行すればよいのかよく見えません。これは今まで各事務局員のスキルに頼って業務を回してきた結果かと思います。また、各委員会との仕事のシェアが不明確です。JOCや外部組織とのやり取りなど、専門委員会でなければ分からない部分も多く、事務局員が苦慮している部分も見受けられます。電話対応にも多くの時間を割いているようです。事務局員の適正な工数配分など、改善については望月専務を中心に早急に行います。

【財政再建】

財政再建については６月の総会で計画を提示いたしました。正味財産の適正化に向けて収入源の確保と支出削減の見える化を実施しなければなりません。計画の詳細は加盟団体の皆様に既にご報告いたしましたのでご参照ください。自己財源である共済会の加入促進は加速しなければなりません。クラウドファンディングによる収入確保も強化します。支出については事務局費の削減と競技会の支出改善を引き続き実行していきます。予算については状況を常に監視し、補正を掛けていきます。任期の２年間で皆様にご協力いただいた基金の返済を目標といたします。

【登山とスポーツクライミング】

登山での課題はトイレやアクセス問題、自然環境保全など多義にわたります。昨年度は減少に転じた遭難件数ですが今だ2946件で遭難者数は3357人です。2019年、私が遭対委員長時代に掲げたストップ・ザ1000、その活動効果は今だに見えてまいりません。登山者への安全登山の指導は喫緊の課題と言えます。正しい登山者の育成が減遭難への近道と考えます。

SC競技については年間８の競技会を開催しています。赤字の根源と言われてきた競技ですが昨年度は黒字化に成功しました。強化にあってはワールドカップで目覚ましい成果を上げ、ロス５輪でのメダル獲得に向けて着実に力を付けています。しかしながらSCの知名度はまだまだ高くはありません。SNSの発信も強化しなければなりません。まずは底辺の拡大を目指した普及に注力し、未来のオリンピアンを育てていきます。国スポでは後催県をフォローし疲弊する地方岳連へ手を差し伸べていきます。また、行政への指導も徹底し、正しい大会を実現いたします。

【おわりに】

今までのJMSCAは内向きの活動が主でした。これからは外部への活動を心掛け、誰もが知る、頼れるJMSCAにして行かなければなりません。組織は人です。理事の皆様が力を合わせ、脳みそに汗をかきながら期待に添える様、頑張りましょう。常にスピード感を持った行動をお願いします。

最後になりますが、いつもご支援いただいているスポンサーの皆様、都道府県山岳連盟・協会の皆様、未熟者ではございますが、変わらぬご支援。ご鞭撻の程、宜しくお願い申し上げます。

Next Generation Cup 2025 in Ryuoh

わたSHIGA輝く国スポSC競技リハーサル大会

開催報告　　国スポ委員長　原　勇人

2025年６月７日（土）～８日（日）、滋賀県竜王町にある「竜王町総合運動公園スポーツクライミング特設会場（ドラゴンハット）」において、「Next Generation Cup 2025 in Ryuoh」が初開催されました。本大会は、小学６年生から中学２年生までの男女を対象に、将来のスポーツクライミング競技を担う“次世代”の育成と競技機会の提供を目的として開催されたものです。

競技は男子の部・女子の部に分かれ、それぞれ２名１チームで構成されるチーム戦として実施しました。男子10チーム（計20名）、女子15チーム（計30名）、あわせて25チーム 計50名が全国からエントリーし、２日間にわたって熱戦を繰り広げました。

競技種目はリード競技とボルダー競技の２種目。リード競技では、予選ラウンドとして２本のルートにフラッシング形式で挑戦し、チーム順位ポイントにより上位８チームが決勝へ進出。決勝はオンサイト形式で行われ、予選同様にチーム順位ポイントが少ないチームが上位となります。選手たちはルートの読みやクライミングの戦略など、チーム内での作戦会議で綿密に打合せ、ルート上で知恵を絞り、懸命な登りを披露し、息をのむ接戦を展開しました。一方ボルダー競技では、予選・決勝ともに４課題が設定され、各課題25ポイントの配点で合計得点によってチーム順位を競いました。ホールドの保持力やムーブの正確性、時間内での対応力など、多様な能力が求められる構成となり、各チームの特長が如実に表れる結果となりました。

総合成績　男子の部			
順位	チーム名	選手名	選手名
１位	TK climb LINK ～東西の絆～	橋爪　健太	上田　大志
２位	Join Forces	額賀　悠斗	宮川　　浬
３位	桃太郎 clim bers	江見　昇真	田中　　昴

総合成績　女子の部			
順位	チーム名	選手名	選手名
１位	いちなな	海野　奈花	濱松いちか
２位	ハルサク	長島　永和	小川さくら
３位	チーム AICHI	長谷　美咲	柴田　　楓

リード

ボルダー

その他の成績については、以下の公式掲示板のＵＲＬまたはＱＲコードでご参照ください。

https://jmanew.sakura.ne.jp/climbing/temp_results/kokutai/pub/shiga_reh/

会場となったドラゴンハットは、全天候型のドーム屋根を備えた国内有数のスポーツ施設であり、クライミング競技にも非常に適した環境が整っています。

今回の大会のために設置された特設のリードウォール（高さ15ｍ、幅12ｍ）と、２基のボルダーウォール（高さ4.7ｍ、幅10ｍ）は、競技の安全性と公平性を担保するとともに、観戦者にとっても見応えのある演出を可能にしました。

本大会は、「Next Generation Cup」として初の開催となりましたが、今後の継続的な開催への期待が高まる非常に意義深い機会となりました。競技を通じて、参加選手たちは技術力のみならず、チームワークや勝負への向き合い方など、次世代アスリートとしての大切な要素を学びました。

また、運営においては、リハーサル大会の位置づけとして、会場設営・進行体制・競技ルールの運用についても重要な検証が行われ、2025年10月３日から５日の３日間開催される本大会に向けた貴重な知見と改善点が得られました。

今後も、地域と連携し次世代を育成する大会の開催を通じて、スポーツクライミングの発展と未来のトップクライマー育成に貢献する大会にして参ります。